The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	発話解釈における終助詞ワの機能
Author(s)	ヴルボウスキー, マテイ
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 138-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

発話解釈における終助詞ワの機能

ヴルボウスキー　マテイ

0. はじめに

本稿[1]では、(1)のような用例に出現する、上昇イントネーション[2]の終助詞ワを取り上げ、その意味（総じて言えば機能）を解明することを目的とする。

(1)　カツオ：ただいま。

　　サザエ：おかえり。ちょうど良かったわ♪。

　　マスオ：何？（サ）[3]

終助詞の機能に関する先行研究は多く蓄積されており、それぞれの形式の機能に関する議論も多岐にわたっている。終助詞へのアプローチの幾つかを(2)にまとめる。

(2)　a.　話し手は、情報の伝達における強弱を調整する

　　b.　話し手は聞き手に対して情報の伝達、または確認をする

　　c.　話し手は動作主体の人称の解釈可能性に制約を課する

　　d.　話し手は、何らかの役割語的な意味を活性化させている

　　e.　話し手は聞き手に対して発話全体の解釈に対して制約を課する

順に、本稿において「主張の連続体」[4]と呼ぶ捉え方（国立国語研究所[5]、1951 等）、伝達態度のモダリティ（日本語記述文法研究会[6]、2003）、人称制限（仁田、1991）という概念のカートグラフィー研究による解釈（遠藤、2014）、役割語としての意味（金水、2003）と発話解釈に貢献するという語用論的な意味（Itani（1996）、Matsui（2000）、内田（2001）や中﨑（2008）等）である。

本稿は、(2e)の機能に絞り、関連性理論（Sperber & Wilson、1995）を理論的枠組みとし、(3)に対する答えを提示する。

(3)　発話解釈における終助詞ワの機能とは何か。

本稿では、上昇イントネーションの終助詞ワの意味を解明するために、まず、終助詞ワの用法及び機能に関する先行研究を概観する。その上で、先行研究（中﨑、2008）が提示している「事態の再認識」という用法を出発点に分析と議論を行う。

1.　先行研究

本節では、終助詞ワに関する先行研究を概観する。終助詞ワの機能や使用状況に関して言及している先行研究は幾つかある（例えば、国語研（1951）、上野（1972）、陳（1987）、服部（1992）、森山（1997）、野田（2002）、研究会（2003）、中﨑（2008）等が挙げられる）が、ここでは、主に終助詞ワに関わる言語現象の記述をしているもの、そして終助詞ワの語用論的な機能に関して述べているものに絞ることとする。

1.1　言語現象の記述

終助詞ワは、「軽い主張」「女性的な言葉遣い」と結び付けられることが多い。この捉え方は、少なくとも国語研（1951）に遡る。

(4)　［終助詞ワは、］話の内容について、軽く主張する。詠嘆の意は、かなり薄れ、むしろ、表現をやわらげ、まるみをつけるひびきを持つ場合が多い。（女性専用）（国語研、1951：233）

「女性的な言葉遣い」とは、終助詞ワを用いることで、話し手が自分のアイデンティーに関してある特定の情報（この場合は女性性）を聞き手に活性化させていることと関連性理論の立場から捉えられる。この機能は (2d)の範疇に入るため、今後は詳しく触れないこととする。

続いて、研究会（2003）では、終助詞ワの機能を「話し手の個人的な感情や考えであることを表すという伝達機能をもっている」（研究会、2003：253）とされ、幾つかの用法が記述されているが、それらは大きく 2 つに分けることができる。1 つは独話または話し手が独話のように述べる【独話・擬似独話系】の用法であり、もう 1 つは発話を「露骨に表出しないように」（研究会、2008：254）して、「和らげる効果」のある【和らげる系】の用法である。【和らげる系】の用法は、国語研（1951）が述べている「軽く主張する」「表現を和らげ［る］」とされている効果と同様の用法として扱ってもよいと考えられる。

(5)　【独話・擬似独話系】

a.　そうだわ。締め切り、今日までだったんだ。（研究会、2003：253）

b.　A「この問題、こうやったら解けるんですよ」

B「あ、なるほど、そうだわ」（研究会、2003：253）

(6)　【和らげる系】

a.　じゃ、そろそろ行くわ。（研究会、2003：253）

b.　A「何か飲む？」

B「そうねえ。コーヒーが飲みたいわ」（研究会、2003：254）

整理すると、終助詞ワの意味規定は、説明的な妥当性を持つには、「和らげる」効果と、「独話･擬似独話」に対して説明を与える必要があることを念頭に置かなければならない。

1.2　語用論的アプローチ

関連性理論の枠組みで､終助詞の機能に言及している先行研究が幾つかある（例えばItani（1996）、Matsui（2000）、内田（2001）等が挙げられる）が、他方、終助詞ワを取り上げるもの（中﨑、2008）は少ない。ここではまず、終助詞全般の特徴に関して述べておく。捉え方によって相違点があるが、共通点に関しては次のことが挙げられる。

終助詞は、（発話の解釈の仕方に貢献するという）手続き的意味をコード化し（Matsui（2000）や中﨑（2008））、（語用論的に補われた命題を埋め込むという）高次明意に貢献す

る（この点においては Matsui（2000）と中﨑（2008）に加え、Itani（1996）、内田（2001）も似た指摘をしている）。よって、終助詞は、発話全体の解釈が最適な関連性が得られるように働く形式であり、発話解釈の際に用いられる手続きをコード化していると言えよう。これらの点においては、終助詞ワも同様であると仮定しても良いであろう。

次に、終助詞ワの機能に関する中﨑（2008）の提案を概観する。中﨑（2008）は、終助詞ワには(7)と(8)の機能があると述べている。

(7)　「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）を明示する（中﨑、2008：167）

(8)　認識事態に対するある種の心的態度が存在することを明示する（中﨑、2008：167）

本稿では、(7)の機能を「認識態度の明示化」と呼び、(8)の機能を「心的態度の存在の明示化」と呼ぶ。(7)で挙げられる認識は、「視覚の他に、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などによる感性的な経験」（中﨑、2008：156））と「ある事情や事態に対する思考や理解といった知的な認識」（中﨑、2008：158）が含まれていると規定されている。中﨑（2008）によると、これらの機能が働くことで、聞き手は、当該発話の最適な関連性が達成されるように、(9)のワ文を(10)及び(11)のように復元する。

(9)　（歌手で多忙なはずき〔原文ママ〕、久しぶりに家に帰ってくる）
はずき：はああー、ママ達の手料理どんなに夢見たことか。
やよい：私達もはずきさんが来ると楽しいわあ、炊き出しみたいで。
仁歳：で、休みの間なにするんだよ、はずき姉。（中﨑、2008：167）

(10)　話し手は、はずき〔原文ママ〕が家に来ると楽しいと認識している。（中﨑、2008：168。下線は原文通りである）

(11)　話し手は、はずき〔原文ママ〕が家に来ると楽しいと好ましく思っている。（中﨑、2008：168。下線は原文通りである）

中﨑（2008）は終助詞ワの機能に関して興味深い見解を提示している。一方で、この捉え方については問題点があり、まだ議論の余地が残されていることを以下で指摘したい。

まず、関連性理論でいう認識態度は、命題が実現可能、望ましい（望ましくない）、真（偽）である、（不）可能である、疑わしいなどといった判断の描写にあたる（Ahern、2010：155）ため、「感性的な経験」及び「知的な認識」を総じて認識的態度として扱うことは、中﨑（2008）のオリジナルな捉え方と考えられる。ただし、関連性理論では、「感性的な経験」によるものを直感的信念（intuitive belief）と呼び、「知的な認識」によるものを反省的信念（reflective belief）としており、ヒトの心的データーベースにおいて本質的に異なるものとして扱っている（Sperber、1997）。よって、「感性的な経験」と「知的な処理」とされている、根本的に異なる概念を「認識活動」のように同一のものと見なすことへの疑問が生じる。

次に、関連性理論では、話し手の心的態度の明示化に関して、言語的な手段で感情を記

述（describe）するよりも、パラ言語的な手段で感情を見せる（show）方が強力だと指摘されている（Ahern、2010：152）[7]。この事実を踏まえ、改めて(9)のワ文を観察すると、主節の述語を占めている感情形容詞以外に、話し手が当該発話を嬉しそうな口調で発話したと仮定すれば、心的態度の存在を明示化するためのより強力な手段が存在することとなる。つまり、聞き手は、「楽しい」のような言語的手段や、表情や特殊なプロソディのようなパラ言語的手段を手がかりに、話し手の心的態度を特定することが容易にできるはずである。そのため、終助詞ワにあえて(11)のような機能を想定する必要はないと考えられる[8]。

最後に、中﨑（2008）によると、「認識活動の明示化」と「心的態度の存在の明示化」という機能は、そもそも個別の終助詞に特有のものではなく、終助詞ゾ、終助詞ワ、終助詞ゼに共通する機能である。したがって、そう仮定すると、それぞれの形式においてどのような形で具現化されるか、またはそれぞれの形式においてどのような傾向があるかなどの議論が必要になってくる。ところが、中﨑（2008）ではこのような違いの議論がされていないため、結果として終助詞ワの機能がより明らかになっているとは言い難い。その上、「認識活動の明示化」と「心的態度の存在の明示化」といった機能は、「和らげる」効果や「女性的な言葉遣い」といった現象の説明にどうつながるかも不明である。

2. 分析

終助詞ワの意味を新たに規定するために、中﨑（2008）で「事態の再認識」と呼ばれている用法の分析を行う。なお、分析・議論を進める際は、とりわけ平叙文を取り上げることとする[9]。

「事態の再認識」とは、以下の用例で表されるものである。

(12)　（海外で何年か振りに味噌汁を飲んで、感激のあまり涙をながす）
　　私、やっぱり日本人だわぁ。（中﨑、2008：164）

(12)において話し手は、「自分が日本人である」という（中﨑（2008）の言葉を借りれば）「個人的事実」を改めて認識している。中﨑（2008）によると、再認識が成立するためには、2つの条件が揃う必要があるという。1つ目は、「当該の事態をあらためて認識（再認識）する契機」（中﨑、2008：164）であり、この場合では「何年か振りに味噌汁を飲む」ことにあたる。2つ目は、「その認識事態に対する「驚き」「感動」といった心的態度が存在［する］」（中﨑、2008：164）ことと指摘されているが、後で示すように、この点に関しては議論の余地がある。さらに、中﨑（2008）は、終助詞ゾには再認識の用法がないという興味深い指摘を行い、その事実を(13)によって裏付けている。

(13)　（海外で何年か振りに味噌汁を飲んで、感激のあまり涙をながす）
　　?おれ、やっぱり日本人だぞ。（中﨑、2008：164。容認性判断は原文通りである）

ただし、中﨑（2008）では、なぜ(13)が容認されないかについて説明を与えていない上に、この捉え方では、終助詞ゾも終助詞ワもともに「認識活動の明示化」と「心的態度の存在

の明示化」を持ち合わせていることになり、詳しい区別が提示されていないため、(12)と(13)の容認性の相違は、これらの機能に基づいた説明では難しいと考えられる。終助詞ゾに置き換えることで容認性が低くなる理由を説明するために、まず「事態の再認識」のメカニズムを明らかにする。

2.1 「事態の再認識」の分析

まず、「事態の再認識」と考えられる用例を以下に提示する。

(14) （朝から連続でいいことが起きたサザエさん）
サザエ：まあ、やっぱり私にとって良いことが起きたんだわ。（サ）

(15) （サブちゃんに客の個人情報を問い詰めるサザエ）
サブちゃん：お客さんのプライバシーに関わることなのでちょっと…。
サザエ：さすがだわ。（サ）

(16) （カツオの嘘を見抜いたフネに対して）
サザエ：さすが母さんだわ。全てお見通しよ。（サ）

「事態の再認識」の分析において手がかりとなるのは、波線部で示されている「やはり」や「さすが」のような文副詞と考えられる。このような文副詞を用いることで、話し手は、当該発話が表している内容に関して何らかの従来の想定（ヒトの認知環境を構成する真偽判断が可能なもの）を持っていることを示しているからである。それぞれ(14)〜(16)に対応する従来の想定を順に並べると、(17)〜(19)のようになる。

(17) 話し手$_i$は、《サザエ$_i$にとっていいことが起きるものだ》と考えている
(18) 話し手は、《サブちゃんはプロである》と考えている
(19) 話し手は、《フネの前では隠せるものがない》と考えている

従来の想定の存在を踏まえると、「事態の再認識」の解釈は(20)のように表示できる。ここでは(16)を例に表示する。

(20) a. 話し手は、《フネの前では隠せるものがない》という従来の想定を持っている
b. 話し手は、フネがカツオの嘘を見抜いたという出来事を認識した
c. 話し手は、心の中において従来の想定をある出来事によって確認し強化できた
d. 話し手は、その旨を誰かに対して提示した

すなわち、「事態の再認識」とは、話し手が当該発話に関する従来の想定（《お母さんの前では隠せるものがない》ということ）を喚起し、その想定を、新しく認識した事態（フネがカツオの嘘を見抜いたという出来事）によって確認し強化できた、と誰かに対して提示する過程であると考えられる。このことを踏まえ、本稿は次のことを主張する。中﨑(2008)で「事態の再認識」と呼ばれる終助詞ワの用法は、話し手が心において行う【従来の想定の強化】にあたり、話し手がそのような心的処理を明示することこそが終助詞ワの意味である、という主張である。

「事態の再認識」において、従来の想定の存在は「事態の再認識」の前提条件であると考えられる。このことは、(21)の作例で確認できる。例えば、フネがカツオの嘘を見抜くのが初めてであった場合、サザエの「さすがお母さんだわ。全てお見通しよ」という発話は、皮肉でない限り、容認度が低い文となってしまう[10]。

(21)　（カツオの嘘を初めて見抜いたフネに対して）

サザエ：??｛φ／さすが｝母さんだわ。全てお見通しよ。

2.2　終助詞ワの手続き

前小節で行った分析を(22)のように抽象化する。終助詞は、発話全体の解釈から最適な関連性が得られるように働く形式であり、発話解釈の際に用いられる手続きをコード化していると捉えれば、発話を(22)のように解釈することは、終助詞ワの機能によると考える。

(22)　話し手は、当該発話が表している内容について、心の中で何らかの処理を行った、と誰かに対して提示する[11]

(22)の「心の中で何らかの処理」とは、前小節で分析対象とした【従来の想定の強化】のようなプロセスを含むが、次小節ではそれだけに限らないことを示す。

議論を進める前に、終助詞ゾと「事態の再認識」との関係に触れる。終助詞ゾには「事態の再認識」の用法がないという中﨑（2008）の指摘は、(14)〜(16)における終助詞ワを終助詞ゾで置き換えると容認性が低くなることで確認できる[12]。

(23)　（朝から連続でいいことが起きたマスオ）

マスオ：??やっぱり僕にとって良いことが起きたんだぞ。

(24)　（サブちゃんに客の個人情報を問い詰めるマスオ）

サブちゃん：お客さんのプライバシーに関わることなのでちょっと…。

マスオ：??さすがだぞ。

(25)　（カツオの嘘を見抜いたフネに対して）

マスオ：??さすが母さんだぞ。

「事態の再認識」に終助詞ゾが用いられないことは、心的処理の指向性で説明できる。ヴルボウスキー（2021）で触れたように、終助詞ゾは、発話の受け手に対して何らかの行為を促すことに特化した形式である。促される行為の中には、現実世界だけでなく、心の中（認知環境）における変化もあるため、終助詞ゾも心的処理に関わっていると考えられる。ただし、その場合は心的処理を誰かに促すという指向となる。それに対して「事態の再認識」の場合は、話し手が心の中で従来の想定を強化したことを明示しているため、心的処理の明示という指向である。すなわち、終助詞ゾを「事態の再認識」に挿入できない理由は、終助詞ゾが伝達している手続きと、「事態の再認識」に伴う心的処理の指向性のミスマッチから説明される。

なお、終助詞ゾにも【従来の想定の強化】が関わっていると考えられる例があるが、この場合、ゾを用いることで、話し手は聞き手に想定の処理を促すことになる。他方、終助詞ワは心的処理の明示という指向を取るため、(26)に用いると容認性が下がる。

(26)　（試合の直前、話し手がチームメートの B の前で決意を固める場面）

A：頑張る｛ぞー／??わー｝！

B：おう！

2.3　終助詞ワの使用に伴う心的処理

ワの機能を(22)のように捉えると、「心の中での何らかの処理」にどのようなものがあるのかが、詳細を解明するにあたって重要となる。本小節では、【従来の想定の強化】以外にどのようなものがあるかを観察していく。

(27)　（本を読んでいるカツオに対して）

花沢：磯野君、本なんか読んでるの。

中島：まさかあ。

カツオ：いや、読書の秋だからね。

花沢：ええ！

かおり：見直しちゃったわー。（サ）

(28)　（サザエの結婚式について話している場面）

サザエ：泣いた泣いた。ハンカチがびしょびしょになってね。

カツオ：結婚式の時だね。

サザエ：ええ。今思い出しても胸がキュンとするわ。（サ）

(29)　（ワカメがサザエさんからのプレゼントに気づいた場面）

ワカメ：クリスマスでもないのにプレゼントが置いてある。

カツオ：えー！

ワカメ：セーターだわ。（サ）

(27)の用例の場合でも、ワ文の述語である「見直す」から、話し手は心において何らかの処理をしたことがわかる。なお、波線部から推測できるように、話し手を含む人々は《カツオは本を読まない人である》という従来の想定を持っていたが、その従来の想定はカツオの言動（カツオが本を読んでいるという行為、カツオによる「いや、読書の秋だからね」という発言）との矛盾が起きている状況にある。この場合、話し手は、認識した出来事（カツオの言動）により、従来の想定（《カツオは本を読まない人である》こと）を削除し、代わりに新しい想定（「カツオは本を読む人である」こと）を導入する、という心的な処理を行ったと考えられる。本稿ではこのような心的な処理のことを【従来の想定の更新】と呼ぶ。

続いて、(28)の用例では、ワ文が表している内容は、話し手がもとより持っている想定

（話し手の結婚式に関する思い出）を、あるきっかけ（この場合、聞き手による問い合わせ）によって想起する処理にあたる。このような心的な処理のことを【従来の想定の想起】と呼ぶ。

最後に、【従来の想定の強化】、【従来の想定の更新】及び【従来の想定の想起】の場合、話し手は当該発話が表している内容と関連するなんらかの従来の想定を持っていると述べてきたが、(29)のように、話し手が対応するはっきりした従来の想定を有しない場合もある。(29)の用例では、話し手のワカメが置いてあるプレゼントに気づき、その中身を開けて確認する場面であるが、話し手にとってプレゼントが置いてあることも、その中身も（プレゼントを開けて確認するまで）未知の情報であるため、聞き手は対応する従来の想定を持っていないと判断できる[13]。プレゼントを開け、その中身を確認することで認知環境に新しい想定（《プレゼントの中身はセーターである》ということ）を導入するため、(29)は【新規の想定の導入】として捉えることができる。

まとめると、話し手は終助詞ワを用いることで、当該発話が表している内容に伴い、【新規の想定の導入】【従来の想定の想起】【従来の想定の更新】【従来の想定の強化】等が行われたことを明示している。

2.4　感情表出をどう捉えるか

では、先行研究で言われている、終助詞ワの使用に観察される感情表出をどう捉えればよいであろう。本小節では、そのような感情表出は、話し手の心的処理から現れ終助詞ワがコード化している手続きとは連動しているが、終助詞ワがコード化している機能ではないことを示す。

分析の際に用いた用例に伴う心的態度を復元すると、(30)〜(32)のようになる。それぞれの心的態度を下線で示している。

(30)　話し手$_i$は、〈サザエ$_i$にとってよいことが起きた〉と喜んでいる

(31)　話し手は、〈サブちゃんはプロである〉と感動している

(32)　話し手は、〈フネの前では全てがお見通しである〉と感嘆している

(22)の処理を念頭に置くと、(30)〜(32)のような表示は(33)〜(35)のように分析できる。

(33)　話し手$_i$は、《サザエ$_i$にとっていいことが起きるものだ》（＝喜ばしいこと）という従来の想定を確認し、強化することができたため、喜んでいる

(34)　話し手は、《サブちゃんはプロである》（＝真面目な性格）という従来の想定を確認し、強化することができたため、感動している

(35)　話し手は、《フネの前では隠せるものがない》（＝優れた洞察力）という従来の想定を確認し、強化することができたため、感嘆している

すなわち、それぞれの従来の想定は、もとよりなんらかの態度（括弧内で示されているもの）を持っていると仮定すれば、終助詞ワが付加された発話に伴う「喜び」「感動」や「感

嘆」といった感情の表出につながると考えられる。話し手は、なんらかの心的態度に埋め込まれている、もとより持っていた従来の想定を、ある出来事（順に、話し手には連続でいいことが起きたこと、サブちゃんのプロとしての言動、フネがカツオの嘘をすぐに見抜いた様子）によって確認でき、強化できたという過程である。言い換えれば、発話に伴う感情表出は、「心での処理」から産出されたと考えられる。

なお、終助詞ワが付加された発話に伴う心的態度がどのような種類の感情になるか（または、そもそも伴うか）は、話し手が持っている想定、及び認識された事態との関係によると言ってよいであろう。例えば、すでに観察してきた用例の中では、(33)のように、喜ばしいこと（自分にとっていいことが起きるものだ）を確認することができれば、「喜び」が産出され、(34)のように、他人の優れた性格を本人の言動で確認することができれば、「感動」が生み出されるといったことが確認できる。(35)の場合でも、話し手は、フネの優れた洞察力を自分の目で改めて確認できたため、感嘆していると推測できる。

他にも(36)のような用例がある。

(36)　（コタツの下の暗闇の中で）

ワカメ：あ！

カツオ：ワカメの手か。

ワカメ：タマいないわ。

カツオ：さっきまでいたのにな。（サ）

話し手と聞き手は、猫のタマがこたつの下で寝ているという想定（波線部に相当）を持っていたが、実際に手で探ってみると、いないこと（ワ文が表している内容）がわかった。いるはずだったのにいないとわかった、言い換えれば、従来の想定を削除し、代わりに新しい想定を導入するという心的処理を行った際に、話し手の「驚き」が産出されたことがわかる。

終わりに、終助詞ワが付加された発話に感情表出が伴わない場合もあることに注目されたい。(37)は、話し手が〈x にお使いを頼む〉ということに対して心的態度を取らない例である。

(37)　（カツオにお使いを頼むフネ）

フネ：カツオ、ちょっとお使いを頼むわ。（サ）

本稿の第 1.2 節で触れたように、中﨑（2008）の捉え方では、心的態度は認識事態に対するものであり、認識事態は（五感による感性的な経験と思考や理解といった過程で規定されている）認識的活動によるものである。しかし、(37)の【依頼】は、五感による感性的な経験でも、思考や理解といった認識でもないため、「認識活動の明示化」と「心的態度の存在の明示化」で説明が困難な例である。【依頼】と(22)の手続きで捉えられた終助詞ワとの関係に関して本稿の第 4 節において触れる。

整理すると、(22)は終助詞ワが付加された発話を最適な関連性が得られる解釈に導く手

続きであり、終助詞ワがコード化している意味である。話し手は、終助詞ワを用いることで、終助詞ワが付加している発話が表している内容に関して自身の認知環境において【新規の想定の導入】【従来の想定の想起】【従来の想定の更新】【従来の想定の強化】等を行ったことを明示する。最後に、心的処理に伴い、喜び、感動、感嘆や驚きが現れうる場合があるが、これらの表出は終助詞ワの機能そのものというより、終助詞ワの機能と連動する副次的なものであると述べてきた。

3. 独話と擬似独話に関して

本節では、(22)の意味規定と独話・擬似独話との関係性を検討する。研究会（2003）は、独話の例として(38)の用例を、「独話的につぶやく」例として(39)の用例を挙げている。

(38) あ、田中さんだわ。こんなところで何をしてるのかしら。（研究会、2003：253）

(39) A「どうしたの？」
B「電車に傘忘れちゃったわ」（研究会、2003：253）

では、(22)のような意味規定に基づいて独話及び擬似独話をどう説明すればよいであろうか。最初に、話し手は、(22)の手続きを用いることで、当該発話が表している内容が心の中で処理されたことを明示しているため、そもそも独話に近い性格を有していると考えられる。なお、個別の発話が独話であるか擬似独話であるかは、(22)の手続きを誰に向けて述べているかによって区別がつくと考えられる。

まず、独話の場合、発話の受け手は話し手自身であると捉えてよかろう。話し手は認識した内容を契機に、心的処理を行うことで、関連性が達成される[14]。それに対し、擬似独話の場合、話し手が自分目当てに述べているかのように解釈されるものの、そのように受け取ることが(22)の手続きによる効果であり、実際には聞き手に対して発話しているため、発話の受け手は聞き手となると捉えられる。この場合、話し手は関連性が達成されたことを伝達している（それにより間接的に聞き手にも認知効果がもたらされる）と考えられる。

4. 「和らげる」効果に関して

本節では、(22)の意味規定と先行研究が述べている「和らげる」効果との関係性を検討する。終助詞ワは機能上、非対話的な使用で用いられる傾向があると述べてきたが、対話的な場面において用いられることもある。実際には、(37)のように、【依頼】などのような、聞き手に働きかける発話行為と共起することが観察される。「和らげる」効果はこの対人的な用法と関わりがあるため、中心的に【依頼】を取り上げる。

話し手が発話を心の中で処理したと提示すると、その発話の提供にある種の消極性が付随すると考えられる。その理由は、研究会（2003）が述べている「話し手の個人的な感情や考えであることを表すという伝達機能」に求められる。つまり、個人的に感じていることや考えていることは、一般的に共有されていないものであるため、何かを個人的なもの

として提示すると、「一般的な考え方ではないかもしれないが、自分はそういう意見である」というニュアンスがこもり、消極的に聞こえるわけである。

本稿では、終助詞ワは、「話し手の個人的な感情や考え」ではなく、「心の中で何らかの処理をした」ことを伝達すると述べたが、終助詞ワの使用に伴う消極性は、これに似た原理が働くことで説明される。終助詞ワを用いることで、話し手が何らかの刺激などを契機に、心の中で何らかの処理をしたことが明示されるため、話し手の心内に関わることにより独話的な響きを持ち、消極的に聞こえるのである。つまり、ワによる消極性は、(22)のような手続きが独話（または擬似独話）に仕向けられていることに起因すると考えられる。

なお、対話における【依頼】などに終助詞ワを付加させると、消極的には聞こえるが、独話ではないことが確認できる。このことは次のように説明できる。話し手は、終助詞ワの内在的な非対話性による消極性を付随させるため、【依頼】をあたかも「心で処理したかのように」婉曲的に提示するということである。なお、ポライトネス理論では、聞き手に何かを依頼することによって、聞き手にコストがかかるとされている（Brown & Levinson, 1987 等）。そのような、聞き手にとってコストとなる行為を求める場合、すなわち何かを依頼する場合、その依頼をより丁寧な形（例えば敬語や間接的な依頼）で提示することによって、聞き手に対して気を配るというストラテジーが挙げられている。この場合も、話し手は、聞き手に対する【依頼】を遂行する発話に終助詞ワを付加させることで、当該発話を婉曲的に提示することになり、ある種の消極性が付随されるため、依頼される聞き手に気配りをしていると考えられる。言い換えると、終助詞ワの使用は、敬語や丁寧語のような、聞き手に対するある種のポライトネスストラテジーとして捉えることができるということである。

終助詞ワがポライトネスと関係していることは、(40)〜(42)によって示される。

(40)　フネ：カツオ、ちょっとお使いを頼むわ。（(37)の再掲）

(41)　フネ：??カツオ、ちょっとお使いを頼む φ。

(42)　フネ：カツオ、ちょっとお使いを頼みます。

本節で触れてきた、発話を婉曲的に提示することによる消極性は、終助詞ワが潜在的に持つ非対話性、すなわち、終助詞ワが元々コード化している、話し手が認識した事態を認知環境に位置付けたことの明示化から現れると考えている。言い換えれば、終助詞ワは、話し手が何かを認識し、認知環境で処理したことを明示しているため、独話的な響きを持ち、消極的に聞こえるということである。

しかし、【依頼】は、認識した事態を認知環境に位置付けるというより、認識事態を契機に、認知環境の想定に基づき、当該の行為を実行することに該当すると考えられるため、根本的に異なる処理である。それでも、【依頼】に終助詞ワを付加すると、独話ではないにもかかわらず、消極性を帯びる。このことは次のように考えられる。話し手は、あえて【依頼】に消極性を加えるために、（処理上別物の）【依頼】を、あたかも【従来の想定の確認】

や【新規の想定の導入】といった心的処理をしたかのように見せかけ、提示したのだと説明される。

要するに、話し手は、【依頼】の効力を保ちつつ、それらの発話行為の提供に消極性を付随させるために、【依頼】のような発話行為を、心の中で何らかの処理をしたかのように提示する、と捉えるのが適切であろう。終助詞ワは、(22)の手続きに従い、(43b)が表している内容に加え、発話行為の【依頼】に関してまで、心の中で何らかの処理を行ったことを示している。そのように提示された【依頼】は、実際は新規の想定の導入、従来の想定の更新、既存の想定の強化等によって得られなかったものであっても、聞き手の解釈上、あたかもそう処理されたかのように捉えられる。

(43) a. フネ：カツオ、ちょっとお使いを頼むわ。（(37)の再掲）

b. 話し手は、〈x_i にお使いを頼む〉という依頼をしたことについて、心の中で何らかの処理を行った、と聞き手 $_i$ に対して提示する

従って、「和らげる」効果は、(22)の意味規定から派生されたものとして捉えられる。具体的な意味派生の過程に関しては、通時論的な考察が必要であるため、本稿では触れないこととするが、現在の予測を簡潔にまとめる。この場合、国語研（1951）が述べている「詠嘆の意は、かなり薄れ、むしろ、表現を和らげ、まるみをつけるひびきを持つ場合が多い」（国語研、1951：233）ということが関連していると考えられる。本稿では、「詠嘆の意」は、感情表出であり、心的処理から現れるものであると説明してきた。そのため、終助詞ワは本来、(22)のように規定されている機能（またはそれに類似した機能）のみを持っていたと推測できる。そして、何らかの過程（国語研（1951）で言えば「薄れる」こと）を通じて、その機能は、「表現を和らげ［る］」効果、「まるみをつけるひびきを持つ」効果、すなわち(43b)で示されている用法を持つようになったと考えられる。

5. 結び

本稿では、上昇イントネーションの終助詞ワを取り上げ、その意味を解明することを目的とした。まず、終助詞ワの用法に関しては国語研（1951）と研究会（2003）の記述、終助詞ワの機能に関しては語用論的なアプローチを取る中﨑（2008）の提案を概観した。その上で、中﨑（2008）が提示している「事態の再認識」を足がかりに、分析と議論を行った。

結論をまとめると、話し手は、ワを用いることで、当該発話が表している内容に関して自身の認知環境において（新規の想定の導入、従来の想定の更新、既存の想定の強化といった形で）処理したことを明示すると示した。中﨑（2008）が終助詞ワの機能として挙げた「心的態度の存在の明示化」という効果は、心での処理に伴う二次的なものであると主張した。

その上で、終助詞ワが、(22)の手続きをコード化していると考えることで、先行研究で挙

げられる独話・擬似独話、そして「和らげる」効果がいかに得られるかに関する説明を試みた。終助詞ワの機能を心的処理の明示化のように捉えることで、終助詞ワに関わる言語現象を中﨑（2008）が提案する機能より統一的に説明できることを示した。

註

1：本稿はヴルボウスキー（2022c）に基づき執筆された。

2：より正確には、終助詞の音調は、前接する語句に対するアクセント的接続の仕方に関して、「順接」と「低接」という用語で捉えるべきであり（轟木（2008）等）、女性の用いる終助詞ワと男性の用いる終助詞ワのいずれも「低接」であると言うべきである。このことは、ヴルボウスキー（2022a）の発表の際に、角道正佳先生からご指摘をいただいた。しかし、先行研究では「上昇イントネーション」と「下降イントネーション」という用語による区別が一般的であるため、音声的な事実にそぐわない記述であることを認めながらも、本稿では先行研究と同様の用語によって区別する。

3：用例の出典は、原則として用例の右側に括弧書きで記す。出典が示されていない例は、すべて筆者による作例である。

4：ここでいう「主張の連続体」とは、終助詞の機能を「強い主張」「弱い主張」といった用語で捉えようとする考え方である。

5：本稿では「国立国語研究所」を「国語研」と略す。

6：本稿では「日本語記述文法研究会」を「研究会」と略す。

7：例えば、話し手は「残念なことに、明日の運動会は中止となった。」という発話を嬉しそうな声で述べたとしたら、「残念なことに」ということが無効化され、聞き手は〈話し手は〈z の運動会が中止になった〉ということを嬉しく思う〉のような解釈に辿り着く。

8：心的態度の存在を明示するために終助詞より強力な手段が存在していることは、終助詞ワに「心的態度の存在の明示化」を想定する必要がないための根拠になるとはいえ、完全に否定するための根拠にはならない。

9：その理由に関して詳しくはヴルボウスキー（2022b）を参照されたい。

10：仮にフネが嘘を見抜くのが初めてであっても、例えば「フネは矛盾を見破る能力が優れている」などの想定があれば成立するが、そのような知識も従来の想定にあたる。

11：手続き的意味でありつつ、命令の形を取らないという点においては Matsui（2000）における終助詞ヨの意味規定（「聞き手が発話 U によって伝達される情報的意図を認識することは話し手にとって望ましいことである」（Matsui、2000：166。筆者訳））という事例が存在している。

12：先行研究では女性が終助詞ゾを使う場合もあると指摘されている（例えば独話場面における使用（研究会、2003）、小さい息子に対する使用（スワン、2004）、使用による冗談

っぽいニュアンス（深尾、2010）と「ギャップ萌え」用法（野田、2016）が挙げられる）が、議論を複雑にしないために、話し手をマスオに設定する。

13：厳密に言えば、話し手はプレゼントを目にしたことで《プレゼントの中身は不明である》という想定を持つようになり、プレゼントを開け、その中身を確認することによって《プレゼントの中身は不明である》という想定を削除し、代わりに《プレゼントの中身はセーターである》という想定を導入する、すなわち【従来の想定の更新】であると捉えることも可能である。このことは、【新規の想定の導入】と【従来の想定の更新】との線引きが難しいという事実を示しているが、本稿では便宜上、それらを区別することとする。

14：話し手がなぜそのことを独り言として言語化するという行為の動機は、おそらく社会的・文化的な要因と関わるため、本稿においては詳しく触れないこととする。

参考文献

内田聖二（2001）「高次表意からみた日英比較への一視点」『人間文化 研究科年報』17、7-18.

上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17、62-77.

ヴルボウスキー・マテイ（2021）「発話解釈における終助詞ゼの機能」『日本語・日本文化研究』31、146-160.

ヴルボウスキー・マテイ（2022a）「終助詞と発話解釈：終助詞ワの意味とは何か」『第41回　日本語日本文化教育研究会』（口頭発表）

ヴルボウスキー・マテイ（2022b）「文末表現スロット仮説―終助詞の統語的な位置をどう捉えるのか―」『間谷論集』16、105-115.

ヴルボウスキー・マテイ（2022c）「終助詞と発話解釈―手続き的意味を中心に―」(博士論文、大阪大学)

遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』63-70. 秀英出版

スワン彰子（2004）「「ぞ」と「ぜ」の談話機能」『講座日本語教育』40、27-58.

陳常好（1987）「終助詞―話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞―」『日本語学』6-10、93-109. 明治書院

轟木靖子（2008）「東京語の終助詞の音調と機能の対応について ―内省による考察―」『音声言語 VI』、5-28.

中﨑崇（2008）「現代日本語終助詞の研究」(博士論文、大阪大学)

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4：第8部　モダリティ』くろしお出版

野田春美（2016）「終助詞による表現の広がり―周辺的な用例から見えてくること―」『日本語学』35-11、7-8．明治書院

深尾まどか（2010）「終助詞「ぜ」「ぞ」の意味機能」『台灣應用日語研究』7、125-142.

深尾まどか（2019）「「わ」の使用に関する調査」『日本語教育』173、31-45.

野田春美（2002）「第 4 部　テクスト・談話とモダリティ」（宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃）『新日本語文法選書 4　モダリティ』229-309．くろしお出版

服部匡（1992）「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43（4）、267-281.

森山卓郎（1997）「「独り言」をめぐって－思考の言語と伝達の言語－」川端善明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』173-188．ひつじ書房

Ahern, A. (2010) Speaker Attitude in Relevance Theory: An Overview. In Wałaszewska, E., Kisielewska-Krysiuk and M., Piskorska, A. (Eds.) *In the Mind and across Minds: A Relevance-Theoretic Perspective on Communication and Translation*, 147-166. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing

Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.

Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language*. Cambridge: Cambridge University Press

Itani, R. (1996) *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hituzi Syobo.

Matsui, T. (2000) Linguistic encoding of the guarantee of relevance: Japanese sentence-final particle YO. In Andersen, G. and Fretheim, T. (Eds.) *Pragmatic Markers and Propositional Attitude*, 145-171. Amsterdam: John Benjamins.

Sperber, D. (1997) Intuitive and Reflective Beliefs. In *Mind and Language*, 12(1), 67-83. Hoboken: Wiley-Blackwell.

Sperber, D., Clément, F., Heintz, C., Mascaro, O., Mercier, H., Origgi, G. and Wilson, D. (2010) Epistemic Vigilance. In *Mind & Language*, *2*(4), 359-393. Hoboken: Wiley-Blackwell.

Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Hoboken: Wiley-Blackwell.

用例出典

「サ」：フジ系列テレビアニメ『サザエさん』1969 年 10 月～放送